



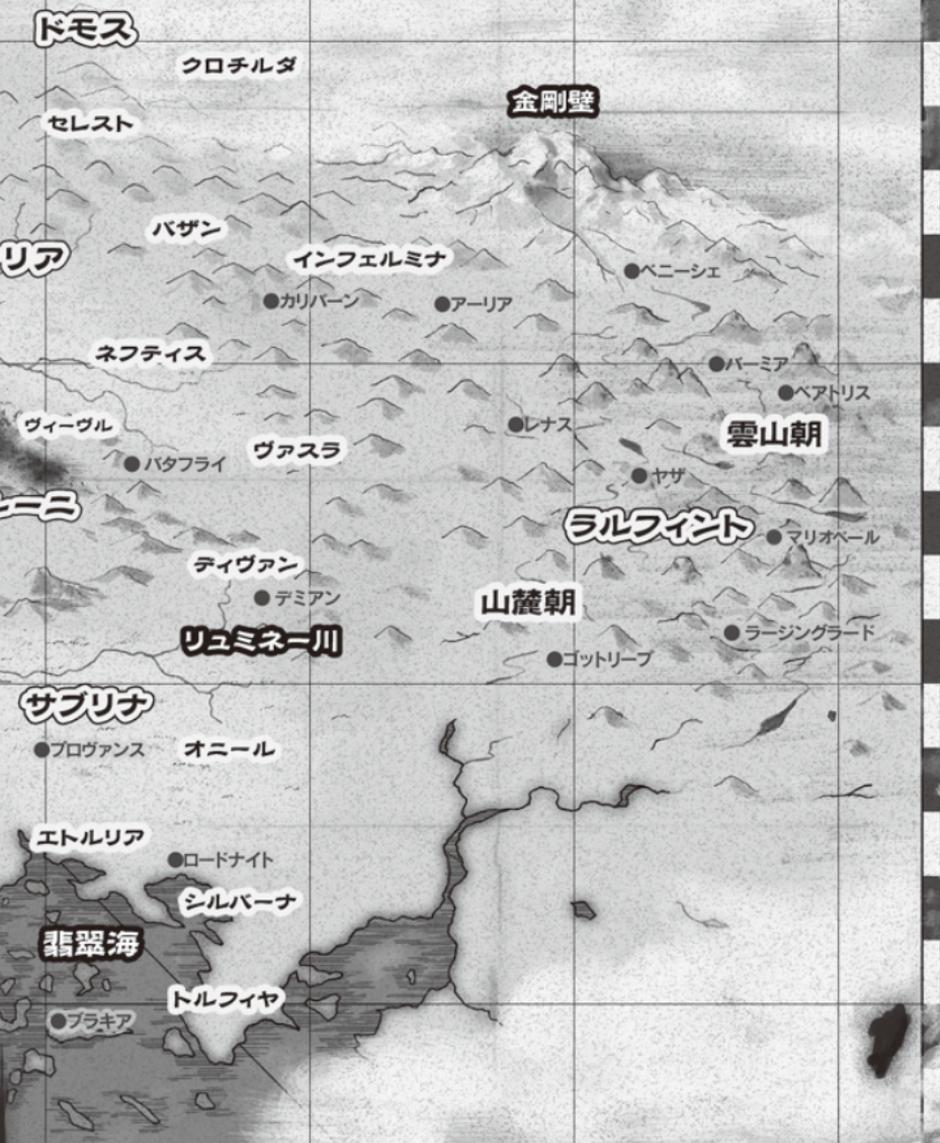
ハーレム ウォーリア

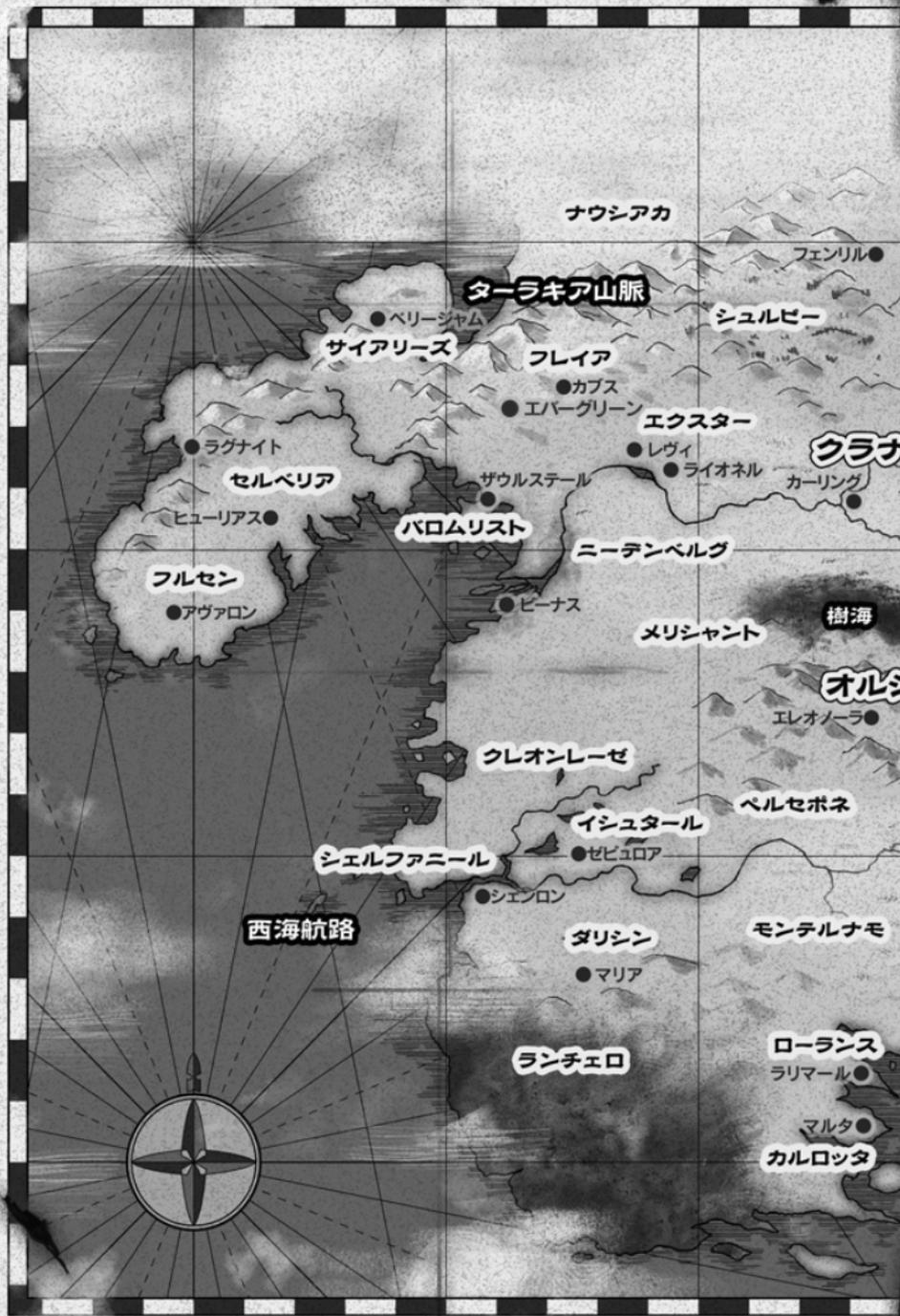
Harem Warrior

小説 竹内けん 挿絵 かん奈

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレリア

●ベリーシャム

●カブス

●エバグリーン

エクスター

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オーリス

エレオメーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルファニール

●シェンロン

西海航路

ダリシン

●マリア

モンテルナモ

ランチェロ

ローランス

ラリマール

●マルタ

カルロッタ





登場人物紹介

Characters



エリザベート

西海の海運を取り仕切るアテネ家の姫君。
おしとやかで才色兼備な絶世の美女。

ロクト

フルセン王国を支えるロックス家の
長男。武に秀でた精悍な青年。



レイニー

幼少の頃からロクトを世話してきた使用人。真面目で健気な娘。



ヴェル

エリザベートについてやってきた従騎士。快活で勝ち気な少女。

第一章	ロックス党	009
第二章	初夜と出兵	048
第三章	フレイア戦線	094
第四章	退却戦	121
第五章	筆頭家老の務め	157
第六章	エバーグリーン城の攻略	201

そして、また沈黙である。

息苦しい雰囲気には耐えかねたロクトは、強引に話題を探した。

「えっと、お前の連れてきた従者。ヴェルといつたな」

「輿入れ早々粗相をしてしまい申し訳ありません」

丁寧な謝罪するエリザベートを、ロクトは止めた。

「いや、謝る必要はねえよ。ロージーとはいい友達になれるんじゃないか。うちの妹は男臭さ100パーセントの中で育ったからな。同世代の元気娘がいると嬉しいんじゃないか」

「そうですね」

一生懸命に話題を探して話すロクトに、エリザベートは優しく微笑み、相槌を打つてくるだけである。

（うわあ……、話はずまねえ……空気が重い。このお嬢様をどうしたらいいんだ。って、花婿と花嫁が、どうせやることは決まっているか）

いいかげん面倒臭くなってきたロクトは、ことを強引に進めることにした。いきなりエリザベートの腰に腕を回して横抱きに抱え上げたのだ。

「あっ」

いきなりお姫様だっこされたエリザベートは、さすがに驚愕の表情を浮かべる。

「武骨な男で悪いな。気の利いた言葉が思いつかん。ここからは夫婦らしいやり方で、親睦を深めるとするか？」

「……はい」

けぶるような目元を伏せて静かに応じたエリザベートは、素直にロクトの胸に顔を埋める。

(意外と重いな。見た目に反して、大柄で骨格はしっかりしているのかも)

そんなことを考えながら、部屋に供えられていたベッドに運ぶと、そこにエリザベートを寝かしつける。

ロクトは無言で覆いかぶさると、その薔薇の花弁のような唇を奪った。

「う……うう……」

みずみず
瑞々しく柔らかい唇だ。

結婚式で行った唇だけが触れる接吻ではなく、唇を擦りあわせながら、じつくりと食ることにした。

舌を出し、ぷるんぷるんの唇を舐め回し、狭間から入れる。

前歯を舐め、さらに奥に、丸まっていた舌を掬い捕った。

「うむ……」

男が覆いかぶさる形であるから、唾液が流れ込んでいるのだろう。エリザベートは驚き抵抗しようとしたが、ロクトは強引に押さえ込む。

長い接吻を終えてから、顔を上げた。そして、エメラルドグリーンの瞳を覗き込む。

「怖いかな？」

「いえ」

気品溢れる眼差しで男の瞳を見つめながらエリザベートは首を横に振るう。その迫力に気圧されたロクトは頬を指で掻きながらさらに質問する。

「え……つと、それじゃ、その……こういうことは経験あるのか？」

「いえ、すべて旦那様にお任せするようにと申しつかつております」

「まあ、そうだよな」

やっぱり処女か。なんか面倒臭いな、と感じてしまった。

造形美としては完璧な美貌を誇り、王家の血筋を引き、貞淑ときている。非の打ちどころが無さすぎて、気後れしてしまう。

しかし、そう思われるのも、男として癪に障る。

(ええ、いい、ままよ。なら、もう好きにさせてもらおう。どうせ、女なんて一皮剥けばみんな同じだろう)

半ば自棄やけを起こしながらロクトは覚悟が決まった。

従順な女の白いドレスの胸元をはだけさせる。

「ああ……」

中にはハーフカップの白いブラジャーがあった。胸元を美しく見せるための女の知恵というものだろう。

そのブラジャーをむしり取ると、ぷるんっと白い双乳がまろび出た。

エリザベートは慌てて両手で胸元を隠す。

「あ、灯りを……消してくださいませ」

「イヤだめだ。俺の花嫁となる女の隅々まで知りたい」

恥じらうエリザベートの手首を握ったロクトは力任せに、頭上に上げさせた。

「ご無体な……」

両手を頭上の枕に乗せたエリザベートは、腋の下を晒した姿勢で、こんもりと膨らんだお椀型の乳房が、魔法光にさらけ出される。

腋の下は綺麗に処理されていて、毛根の欠片も見当たらない。

そして、乳房は、まさに水蜜桃という例えに相応しい果実であった。

仰向けになってもいささかも型崩れしない。

かぶりついたら、甘くジューシーな果汁が溢れてくるのではないか、と思える乳房だ。その頂にはルビーレッドの乳首が輝いている。

思わず凝視するロクトに、エリザベートは不安そうに質問する。

「いかがいたしましたか？ わ、わたくしの身体、変ですか？」

「い、いや、その……あんまり、綺麗で驚いた」

見惚れていたと思われるのもなんだか恥ずかしいロクトは、ぶつきらぼうに答えた。

「ありがとうございます……」

これだけの美貌を誇りながらも、不安があったのか、エリザベートは嬉しそうに頬を染

める。

その女らしい表情に一瞬、魅せられたロクトだが、そう悟られるのが気恥ずかしく、そのまま左の乳房に顔を埋めた。

「ああ」

夫に組み敷かれた花嫁は、驚愕の声を上げる。

顔に感じる乳房の感覚は、たゆんとしたしなやかさ。

物凄く柔らかいのに、型崩れしないという驚異の乳房だ。

「チュ——ッ」

ロクトは砂漠で喉の渴いた旅人が、水を求めるかの如く、美しい乳首を吸ってみた。果汁は溢れてこなかったが、目に見えない男を惑わす謎の物質は出ているようだ。

「ああ、そんな、強く、吸われて、は……ああ」

初めて乳房を吸われた女は、戸惑い、混乱していたようだが、やがて乳首が硬くなってきた。それでも構わず吸い続けていると、やがて女は甘い声を出し始める。

「あ、なに、これ、ああ、そんな……変、わたくしの身体、変になってしまふ」

惑乱の声を上げる新妻の姿を、ロクトは冷静に観察する。

（なるほど、お上品な女でも、乳首を吸われると感じると見える……）

美しすぎてどこか人形めいた女が乱れていることに気をよくしたロクトは、左右の乳首を交互に吸った。

執拗に舐めしやぶられたルビーレッドの両乳首は、男の唾液に濡れ輝き、ピンピンにシコリ勃たつてしまふ。

「ああ……」

乳首を男に陵辱される感覚に支配された女は、やがて抵抗する気力を失った。腕からも力が抜けたことを見て取ったロクトは、両腕を解放し、乳首からも顔を上げた。

「ふあ……」

エリザベートが安堵の溜息をついたのもつかの間、ロクトはその下半身を持ち上げた。「キャッ」

驚きの悲鳴を上げるエリザベートの下半身が高く掲げられ、白いレースの幾重にも巻かれたスカートがまくれた。

白いストッキングに包まれた二本の足を左右に豪快に開かせる。

いわゆるマンガり返しの姿勢だ。

エリザベートは白いスカートの下に、白いストッキングを穿き、白いガーターベルトで吊るしていた。その奥に白いショーツが穿かれている。いずれも白絹であろう。

ロクトの目の前には、白いトリプルレースのついた豪華なショーツの股ぐら部分がきた。（こんなお上品な顔していても、濡れるんだなあ）

総レースの上品な白いショーツの中心に、ポツンとした沁みができていた。

そこを指で優しく撫でる。

「ああ……」

エリザベートが艶めかしい声を上げた。

薄い布越しに女の性器の形が伝わってくる。クリトリスも硬く突起しているようだ。そこを優しく撫でながら質問する。

「よ、お前、ここ、自分で触ったことないのか？」

「自分の身体です。触ったことぐらいいあります」

「いや、そういう意味じゃなくて、オナニーで触ったことはないのか？」

ジロリと、思いつきり睨まれた。

下品なことは聞くな、ということらしい。

（下品な男ですいませんね）

内心軽く肩を竦めたロクトは、次の行動に移る。

（それじゃ、いよいよ、オマ○コを見せてもらおう）

あまり興味がない女とはいえ、やはり初めての女の陰部を前にすると、高揚感を感じる。ロクトは、エリザベートの両足を揃えさせると、ショーツを引きずり上げた。

「い、いやああ……」

悲嘆の声とともに、ショーツと女の股間の間で、ツート透明な糸が引かれた。

抜き取ったショーツを、エリザベートの顔の横に置いたロクトは、その太腿の裏を持つて、再びマングリ返しにする。

この上品な女にわざと恥ずかしい姿勢を取らせなくなったのだ。

しかし、エリザベートは両手で、陰唇をしっかりとガードする。それをロクトは見咎めた。
「手をどけな」

「しかし」

気位の高そうな女の緑の目が、動揺に潤んでいる。

「俺たちは夫婦になるんだぞ。そこを晒さないと始まらないぞ」

「は、はい……」

今日会ったばかりの夫に説得された新妻は、しぶしぶながら両手を離した。

ふわっと白金色の陰毛が立ち上がる。

なかなか豊かな陰毛だ。

また、マングリ返し of 姿勢だから、肛門までまる晒しである。

（お上品な顔をしていても、排泄はするってことだな。しかし、こうやってみると、顔がいいだけではなくて、スタイルも抜群だな。それに意外と筋肉もしっかりとついている）

花嫁ドレス姿もゴージャスだったが、裸にしてみると、その美しさはさらに際立つ。

双乳は大きく、腹部はくびれ、臀部は左右に張っている。手足は長く、細すぎず、太すぎない。

まさにゴージャス美人と例えるに相応しい美女である。

好みの女ではないが、興奮を隠しきれないロクトはさらに肉割れの左右に親指をあてが

つて、豪快に割った。

「あ……恥ずかしい……」

羞恥の限界と言いたげにエリザベートは顔を横に伏せた。

（おゝお、恥辱に震えているねえ。しかし、オマ〇コの中までお上品というか、綺麗なものだ）

赤い珊瑚で作られているかのような繊細さである。

淫核は包皮に包まれた完全な包茎。かなり小さそうだ。

恥垢もない。きっと勝手知ったる侍女が、丁寧洗い清めたのだろう。

そして、立ち昇る薫りが驚愕ものだった。

一般的に処女の生殖器は、臭いと言われている。

もともと排泄器官が近くにあるのだし、臭って当然なのだ。そのうえ、処女膜のせいで膣穴が狭く、中に恥垢などが溜まりやすい。さらには性的に未熟な女ほど、自分で触れることに躊躇いを覚えるから、奥まで丁寧に洗わない。

だから、潔癖性の女ほど、その生殖器からは強烈な臭気がするものだ。

もつとも男から見ると、その匂いに、たまらなく性欲を刺激される。

しかるに、いまエリザベートの生殖器から立ち昇るのは、なんと薔薇の香りだった。

おそらく、香水の利いた風呂に入ってきたのだろう。つくづく隙のない女である。

（それにあまり濡れてないな。レイニーのやつなら、少し悪戯するだけで、失禁したよう

にダダヌレになつてしまふのだが……)

先ほどショーツを脱がす時に糸を引いたくらいだから、さぞやダダヌレであろうと期待したのだが、案に反して表面がうっすらと濡れている程度である。

初めて男の前で、股を開いたのだ。緊張しているということもあるのだろうが、あるいは、オナニー経験があまりないようだから、性感があまり発達していない、ということなのかもしれない。

(さすがに、このまま入れるのはまずいよな)

レイニーからもくれぐれも優しくするようにと釘を刺されている。

(まあ、舐めてやれば、濡れるだろ。それに、そのお上品なお顔もここを舐めたら崩れるだろうしな)

晒された陰唇越しにエリザベートの羞恥に赤く染まる顔を見て、意地悪く考えたロクトは、マングリ返し中の花嫁の陰唇に口づけをした。

「そ、そんな……汚い」

どうやら、ここを舐められるという事態を想定していなかったらしい。エリザベートは慌てて逃れようとする。

しかし、ロクトは許さない。マングリ返し of 姿勢で太腿の裏を押さえて固定したまま、陰唇を隅々まで舐め回す。

「ああ、そんなところをなぜ? ああ、な、なに……これ、痺れる。ああ、ダメエ」

二十二歳になるのに、性的には本当に未熟な女のようなのだ。

しかし、陰唇を舐め回される快感に翻弄されているように見えても、その喘ぎ方はどこか上品である。

「あ……あ……あ……」

もっと翻弄してやりたくなったロクトは、薄い包皮に包まれた淫核を舐め回し、中からピンク色の肉真珠を取り出した。

「ひい！」

美しい花嫁は引きつった悲鳴を上げる。

(小さなクリトリスだが、クリトリスはクリトリスだな)

おそらく初剥きされたのではあるまいか。真っ赤な肉芽がプルプル震えている。

気をよくしたロクトは、剥きだしの肉芽を集中的に舐め回してやる。その結果、小さな膣穴からトプトプと愛液が溢れてきた。

そこで右の人差し指を膣穴に押し込んでやる。

「イタッ」

不意にエリザベートの肢体がビクンッと震えて、いままでとは違う激痛に満ちた悲鳴を上げた。

それに驚いたロクトは手を離す。

「あ、すまん」



ヴェルは抵抗しようとしたが、もはや後の祭りだ。

ロクトの右の掌は大陰唇を掌で包み、マッサージをする。

「だだ、ダメ、やめて、ボク……ボクは……」

男の膝から逃れようとする乙女の、小陰唇を人差し指と中指の間、中指と薬指の間で挟んだ。

クチュクチュクチュク……。

中指が肉割れの中を卑猥な水音を立てながら捏ね回す。

「あああ♪」

ついにヴェルは大きく口を開けて、甘い悲鳴を上げた。

性に未熟な女でも、背後から抱きしめられて乳房や陰部を刺激されると感じやすい。それは男の腕が、普段ひそかに自流じりゅうしている時と、同じ角度で入ってくるから、安心感があるからだと言われている。

左の胸と陰部を弄ばれたヴェルが甘い吐息を漏らし始めたことを見て取ったロクトは、さらに頷合いを見計らって、割れ目の始まりの部分に中指を置き、引き上げた。

「ひっ」

クリトリスが剥け出たことを察したロクトは、そのコリコリとした器官に中指を添える
と、優しく撫で上げてやる。

「あ、ダメ、そこ、ダメ、そこ、そんなふう、されたら、ひいあん♪」

乙女の悲鳴など関係なく、ロクトの中指は一定の速度で、硬い肉芽を下から上へと、何度も角度を変えて撫で上げる。

そして、クリトリスが完全に勃起したところを見澄まして、中指と人差し指の狭間で摘み上げた。

「ひいひいひい」

「これがお前のクリトリスか。小粒だがなかなか敏感じゃないか」

悶えるヴェルに挿入の言葉を浴びせながら、ロクトは愛液をたっぷり絡めた人差し指と中指を交互に上下させ、勃起した淫核の側面を執拗に弄ぶ。

「ああ、そんな……そこ、ばかり……らめえ〜」

はじめは小さかった淫核も、いまでは弾けそうなほどにぷっくり膨らんでいる。

それを円でも描くように弄り回してやった。

「どうだ、こうされるの、気持ちいいだろ？」

「う、うん……」

ヴェルはしぶしぶといったていであるが、認めた。

頬を染めて恥じ入る顔とは裏腹に、捕らえられた淫核はヒクヒクと小刻みに震えている。若いころから女に不自由したことの無いロクトは、これが絶頂の寸前であることがわかってはいるが、すぐにはイかせない。じつくりと時間をかけて弄び、ヴェルがいきそうだなと察すると指を離し、少し経つとまた優しく摘んだ。

「そ、そんな〜」

決して望んだ快楽ではない。しかし、執拗なクリトリス責めの生殺しに、ヴェルは世にも情けない表情で身悶える。

口元はだらしなく緩み、目の焦点も合わない。

ホットパンツのまたがり部分が濡れて変色し、二つの穴から出ている健康的な足の内側がテラテラと濡れ輝く。

健康美少女の理性と肉体は完全に溶かされた。

「はあ、はあ、はあ、もう……」

「どうして欲しい？」

「イ、イかせてください」

もう限界と叫びたていのヴェルは、理性を失って懇願した。

それと悟ったロクトは、勃起しきった剥きだしの淫核を、ツンツンツンツンと高速で小突き回した。

「ひいつ、ひいつ、ひいつ、ひいつ、ひいつ、ひいつ」

ロクトの指先で小突き回す速度が上がるに従ってヴェルの悲鳴は甲高くなり、夜の砂漠に吸い込まれていく。

「ああ、もうダメエエエエエエエエエエ!!!」

ビュッ!

ビクビクビクビク。

女主人に忠実な従騎士は、女主人の旦那様に悪戯されてイってしまった。

ヴェルの肢体が激しく痙攣している間、ロクトの中指はクリトリスを押したままだった。

「ああ、ああ、ああ……気持ちいいいい」

トプトプトブ……。

引き締まった下腹部が激しく痙攣し、膣穴から愛液が大量に溢れ出した。

お陰で、ホットパンツの中は失禁でもしたかのように大洪水だ。

頃合いを見計らってロクトは、ホットパンツから右手を抜くと、ヴェルの鼻先で指の間に糸引く粘液を見せつける。

「いい濡れっぶりだな」

「もう……意地悪」

赤面したヴェルは、視線を明後日の方角にずらしながら、口を尖らせて不満を言う。

「ここまでされても、俺とやりたくないか？」

「はう……大将って、見た目通り、野獣だよね」

「酷いな」

ロクトは愛液滴る指を、ヴェルの小さな口の中に入れる。

ヴェルはまるでフェラチオでもするかのように、自分の愛液のかかった男の指をしゃぶってから口を開いた。

「だって、エリザベート様みたいな素敵なお嫁さんをもらったのに、あの家令のお姉さんに、女狐將軍、そのほか、大將のためなら、いつでも股開きますって女騎士がそこらじゅうにいる。そして、今度は奥方様からのお目付役であるボクにまで手を出そうというんだから」

「俺はお前が好みなんだよ」

そう宣言したロクトは、ヴェルの身体を反転させると、唇を奪った。

「う、うう……うむ」

小さな唇を舐め回し、小さな前歯を舐め、小さな舌を搦め捕る。

そうやって情熱的な接吻をしながら、ロクトの両手は素早く、ヴェルのホットパンツと下着を引きずり下ろしていた。

そして、接吻を終えたところで、鼻先で宣言する。

「やらせろ」

ロクトの前で膝立ちになってヴェルは、なんとも歯切れ悪く応じる。

「うん、まあ、エリザベート様を裏切ることになっちゃうけど……。大將みたいな人が出さないと身体に悪いよね。他の女騎士と浮気するよりは、ボクとやったほうが、まだエリザベート様は納得できると思うし……」

ヴェルの基準は、どこまでもエリザベートであるらしい。

いささか呆れながらも、ロクトは逸物を取り出す。それを見下ろしたヴェルは目を見張

る。

「うわ、予想はしていたけど、でっかい。太くて大きい。そんな大きいのを入れるの」

「ああ」

ロクトの言葉に、ヴェルは頬を引きつらせる。

「と、当然、エリザベート様の中にも入れたのよね」

「夫婦なんだから当然だろ。さあ、グダグダ言っていないで、始めるぞ。俺はもう我慢できねえ」

ロクトは、ヴェルの小さな尻を抱えて引きずり下ろす。

「ひい」

諦めた表情を浮かべたヴェルは、素直に膝を開いて腰を下ろす。

陰毛の少ない濡れた陰唇に、いきり立つ肉棒が添えられた。

「お前、初めてなんだろ」

「うん」

傍から見ても、処女と丸わかりの娘は、素直に認めた。

「なら、力抜けよ。下手に気張ると、変なところ裂けたりするかもしれないからな」

「うん、わかった……あ、でも、やっぱり、エリザベート様を裏切るわけには……」

「諦めて俺の女になれ」

いつまでも煮えきらない少女に業を煮やしたロクトは有無を言わず、逸物を叩き込む。

巨大な肉棒が、小柄な少女の股間にゆっくりと沈んでいく。

ブチっ！

「は、はあああ」

乙女の証を打ち抜かれた少女は、ロクトの頭を抱いて夜の月に遠吠えする狼のように口を開く。

ズブ、ズブズブズブ……。

その後も巨大な肉棒は問題なく沈んでいき、ついには最深部を穿つ。

破瓜の痛みに顔を歪めながら、ヴェルは非難してくる。

「くっ、熱い。それにガンガンに硬い……、こんな凶悪なものを、あのお綺麗なエリザベート様に入れただなんて、鬼畜な所業だわ」

「仕方ねえだろ。夫婦なんだから。そんなことより、あんなすかした女のオマ○コより、お前のオマ○コのほうが気持ちいいぜ」

「そんなこと、言ったら、ダメえ……。エリザベート様のオマ○コのほうが、気持ちいいに、決まっているんだから」

どこまでも主人に忠実な娘である。

単純に襲の豊富さとか、柔軟性では確かにエリザベートのほうが上かもしれない。しかし、締めつけのよさという意味なら、ヴェルに軍配が上がるだろう。

（まあ、オマ○コの出来不出来なんて、関係ないけどな。ようはその女が好きか嫌いかで、

気持ちよさは決まる)

単純にロクトは、エリザベートのような女が好きではなく、ヴェルのような女のほうが好みだ、ということだろう。

ヴェルのせいで最近、溜まりに溜まっていたものが早く出たいと、逸物を駆け上がってくる。

「いくぞ」

ここは戦場であるし、そうそうゆっくりできない。

それに相手は初めてでもあるし、下手に頑張るよりも、さっさと射精してやるのが優しさだろうと、感じたロクトは、ヴェルの胸に顔を埋め、小さな乳首に吸いつきながら、腰を激しく上下させる。

「はあ、はあ、はあ、はああ、凄い、オマ○コが、オマ○コが広がっちゃう」

ザラザラで鋭角なまでの贅肉が、肉棒を刺激してくる。

それはいろいろな意味で欲求不満であったロクトには心地よい刺激であった。

「いくぞ」

「はあ、へ、ああ、ひいひいひい」

宣言と同時に、ロクトは欲望を吐き出す。

ドビュ！ ドビュビュッビュ!!!

小柄な少女の細い腹部に、野獣の如き男の溜まりに溜まった欲望が吐き出される。

「あ、ああ、凄い。熱い、熱いものがいっぱい、中にいっぱい、入って……くる、あああ
あああ!!!」

ビクビクと全身を痙攣させたヴェルは、そのままぐったりと頭を後ろに下げて脱力する。膣内に男の欲望を注ぎ込まれるというのは、女に本能的な歓びを与えずにはおかないの
だろう。

破瓜の痛みも忘れたように、惚けた表情になってしまった。

やがて我に返ったヴェルは、世にも情けない顔でぼやく。

「ああ、ボク、どうしよう？ エリザベート様の郎党なのに……エリザベート様の旦那様
にやられちゃった」

この期に及んでまだ、そんなことを心配しているヴェルに苦笑しながら、ロクトは応じ
る。

「そういうば、同じ男にやられた女を、棒姉妹というそうぞ。これでお前とエリザベ
ートは棒姉妹だ。より関係が深まってよかったじゃないか」

「はあ、はううん……最低っ」

ロクトの胸に顔を埋めたヴェルは、無言でポカポカとその胸を叩いた。

※

「さて、上手く逃げられるかな」

先の戦いで、フルセン軍はその軍事物資のほとんどを使ってしまった。ここでさらなる



ロクトに強く命じられると、レイニーはいつものようにしぶしぶ従う。

執事服からは、瘦身長軀の女体があらわとなる。乳房は限りなく平らであり、ズンドウ体型だ。

一般的な女性美という概念からいえば、いささか外れているが、これはこれで魅力がある。

裸身に眼鏡だけ残したレイニーは、ロクトの右側に跪いた。

「よし、お前ら全員まとめて面倒見てやる。そして全員、明日は足腰立たなくしてやるからな」

寝台の中央で胡坐をかいたロクトの左からヴェル、エリザベート、カーラ、レイニーが並んだ。

四人まとめて両腕で抱きしめたロクトは、まずは女たちの唇を順番に奪った。

エリザベートの薔薇のような唇、カーラのしっとりとした唇、ヴェルのぷるりんとした小さな唇、レイニーの薄い唇。

四者四様の唇を交互に味わう。

ロクトのやりように、女たちは呆れたようだが、そのうちに面白がって、それぞれに工夫をしてくる。

「う、うむ」

自分よりも他の女と長く接吻している、と思うと面白くないのだろう。女たちは競って

積極的に男の唇を吸い、舌を伸ばしてきた。

「うむ、うむむむ……」

さすがに四人の唇を同時に吸うことには無理があつたが、女たちの頬が合わさると、四人の唇を一つの唇に見立てたロクトは、右から左、左から右と豪快に舐め回した。

そうやって四人の唇を思う存分に陵辱したところで、ロクトは命じる。

「お前ら、膝立ちになりな」

ロクトの意図を察した女たちは、一瞬、みな他の三人の様子を見たが、もはや毒を食らわば皿までという心境なのだろう。

素直に膝立ちになった。

胡坐をかくロクトの鼻先に、大きいから小さいのまで、合計八つの乳房が並んだ。

乳房の大きさは、エリザベート、カーラ、ヴェル、レイニーの順番だ。乳首の大きさも、それに準じた。

エリザベートは艶やかな赤、カーラはピンク、ヴェルは茶色で、レイニーは小粒で黒っぽい。

色や形は違えども、男を惑わすには十分な魅力がある女の女たる器官。それを前に鼻息を荒くしたロクトは、夢中になって顔を埋めると、乳首を吸いまくった。

さながら乳首の踊り食いといったところだ。

豪快に乳首を舐めしゃぶられた女たちの乳首は、どんどんと尖り、勃起してくる。と、

同時に女たちの呼吸も荒くなっていく。

「はあ、はあ……まったく、どうしてここまでおっぱいに執着できるのかね。男つてのは」
カーラの声に、エリザベートが答える。

「うふふ、この男の可愛さがわからないなんて、所詮、女の遊びを知らない女ですね」
「うわ、ムカつく女……あん♪」

口でなんだかんと言っても、感じていることは、その乳首が物語っている。

合計八つの乳首を、一つの口でしゃぶり回すのは、限界があり、ロクトはさらに両手を使つて、夢中になって女たちの乳首を扱きまくった。

「ああ、あん、ああ……」

さすがに絶頂まではいかないが、乳首を弄り倒された女たちの喘ぎ声が大きくなってきた。

四人とも膝立ちのまま、内腿を擦りあわせている。

それと見て取ったロクトは、さらなる指示を出す。

「お前ら、その場で立ちな」

次にロクトがしようとしていることを、察することのできた女たちは、またも他の三人の顔色を窺ったが、逡巡は一瞬だった。

四人とも、一言もなく素直に立ち上がる。

ロクトの鼻先に今度は、女たちの股間がきた。

四人とも足が長い。腰の位置が高いのは、レイニー、エリザベート、カーラ、ヴェルという順番だ。

エリザベートの股間では白金色の陰毛が、ふっさり茂り、レイニーの股間には縮れた黒い陰毛、カーラの銀灰色の陰毛は左右がカットされて整えられている。ヴェルのオレンジ色の陰毛は本数がかなり少ない。

四者四様の陰毛に彩られた女性器だが、いずれも無様に濡れている、という点では同じであった。

ちなみに一番濡れが酷いのは、エリザベートだった。

(こいつ、ほんと、お上品なのは表面だけで、中身はど淫乱なんだなあ)

淫乱な女が嫌かと聞かれれば逆で、もちろん、大好きだ、と答えるロクトである。

「お前ら、オマ○コを自分で開いてみせな」

ロクトの命令に、エリザベートが情けない声で答える。

「そんな、そんなところまで見比べるのですか？」

「ああ、グダグダ言わずに、とつと開きな。開かない女は舐めてやらないぞ」

ロクトの横暴な命令に、エリザベートは鼻を嚙り上げながら応じる。

「旦那様の意地悪」

男にクンニされる歓びを知ってしまったているエリザベートは、泣きそうになりながらも、自らの右手を股間に下ろすと、人差し指と中指を肉裂の左右に添えて開く。

トロトロトロトロ……。

中に溜まっていた女蜜が、糸を引きながら滴り落ちる。

「まったく、こんな遊びに付き合うなんて、あたしも人がいいわ」

ブツクサ言いながらも、カーラも同じように右手を下ろして、陰唇を開いた。

「エリザベート様がやられるなら、ボクも」

「若様の命令ならば……」

ヴェルト、レイニーもまた従った。

愛液の蜜が滝のように滴り、ロクトの顔の周りが強烈な牝臭に包まれる。

エリザベートの陰唇は鮮やかな赤であり、そのさまは赤貝を連想させた。さすがは海育ちの女と納得させられる。

カーラの陰唇は、サーモンピンク。ふわふわにふやけている感じだ。

ヴェルの陰唇は、白っぽいピンク。姫貝を連想させる。

レイニーの陰唇は、他の三人に比べると小陰唇が大きくて灰色がかっており、使い込んだ、と見る者を納得させた。

「どれも美味しそうだ」

舌舐めずりをしたロクトは、目の前の蜜の滴る陰唇に、交互にしゃぶりついた。

「ああ、ああん、はあ〜ん」

女たちの嬌声を聞きながら、四つの女の股に、交互に顔を突っ込み、陰唇の味比べをす

る。

(普段は違いなんてわからないが、こうやって比べると違うもんだ。ヴェルのオマ○コが一番、匂うな)

若いからか、濃縮という感じがする。逆にレイニーの陰唇からはほとんど匂いがしなかった。

とはいえ、四人の股の間へ交互に顔を突っ込んでみると、そのうち匂いも味も関係なくなってしまう。

「はあ、はあ、はあく、もうダメえええ……」

最初に悲鳴を上げて、その場に崩れ落ちたのは、ヴェルであった。次いでエリザベート、カーラの順で膝を崩し、レイニーは最後までなんとか立っていた。

そのレイニーにも、身ぶりで座るように命じてから、ロクトは口を開く。

「さて、そろそろちんぽをぶち込んでやるから、そこに四人並んで、尻を突き出しな」
ロクトの指示に従って、四匹の牝は並んで四つん這いになり、尻を差し出してきた。

「まったく、浅ましい女たちだな」

四つ並んだ女尻を撫で回しながらロクトは囁く。

(こうやってみると、なかなか壮観だな)

ロクトの左からヴェル、エリザベート、カーラ、レイニーの尻が並んでいる。体型が違う四人は、尻の形もまた違った。

ヴェルは小さく引き締まったブリケツ。

エリザベートはどっしりとした安産型。

カーラはむつちりと肉付きのいいハート型。

レイニーは肉付きの少ない小尻。骨盤が狭く、尖ったような形である。

別にどれが優れていると格付けをするつもりはない。いずれも魅力的な女尻である。

思わず魅せられているロクトに、エリザベートは尻を震わせながら訴える。

「早く、入れてください」

「そう焦るなよ」

ロクトの逸物ももはや我慢の限界である。早く女たちの中に入りたいと、訴えてくるような逸物を、一番左のヴェルの濡れた陰唇にそっと添えた。

しかし、入れることはしない。亀頭部に愛液をぬたくっただけで隣のエリザベートの膣穴に移る。

ここでも入口で遊んだだけで、愛液の糸を引かせながら、カーラの膣穴に移り、そして、レイニーに移る。

そうやって女たちの膣穴を浅くえぐってやっている、女たちは欲求不満から狂ったように尻を高く掲げて振りだした。

「早く、早く、奥まで、ずぼっと奥までお願いします」

とエリザベートが懇願すれば、負けじとヴェルも懇願する。

「ボクももう我慢できない。お願い奥まで」

そんな主従を横目に見ながら、カーラは腰を高く掲げる。

「今日、思いつきり楽しまないと、次いつわたしとできるかわからないわよ。もしかしたら、今日が最後かも」

確かにいつでもできる妻よりは、もしかしたら最後になるかもしれない女のほうに興味が出てしまうのは仕方ないだろう。

「おほほっ、さすがは、女将軍ともなりますと、知恵が回りますわね」

思わずエリザベートは、右隣のカーラを睨みつける。

最初に入れてもらおうと競いあう、浅ましい女たちの欲求に應えて、ロクトはズボリと逸物を奥まで押し入れた。

「あん♪」

子宮口を押しされた女は歓喜の悲鳴を上げて、のけぞるが、ロクトは一突きで隣に移る。
(オマ○コの中身の形も違うもんだ)

エリザベートは中にウニでも隠しているかのようにザラザラでグネグネ。カーラはブツブツのザラザラ。ヴェルは全体に狭く褻も多い。レイニーはキュッキュツと締め上げてくる。

四者四様の蜜壺の犯し心地を存分に堪能していると、エリザベートが泣きだした。

「ああ、こんな犬みたいいな姿勢でやられるだなんて、屈辱的です。しかし、旦那様にやら

れているのだと思うと、気持ちいい」

「うわ、あんた自分のお嫁さんを、完全に調教したわね」

カーラは呆れ顔である。

こうやって女を四人並べて交互に犯していると、女として互いを意識しているからか、喘ぎ声をドンドン大きくしていく。

「もうダメ、我慢できない。イかせて、イかせて頂戴」

欲求不満の女たちは、恥も外聞も理性も、女としての恥じらいも捨てて、浅ましく尻を掲げてくる。

パクパクしている膣穴がなんとも哀れだ。

「仕方ないな。それじゃまずはカーラからだ」

「ええええええ!!!」

ロクトの宣言に、他の女たちから不満の声が上がった。しかし、いかに自慢の逸物とはいえ、一本しかないのだから、こればかりはどうにもならない。

「少し待っている。必ず全員満足させるから」

そう力強く宣言したロクトは、まずはカーラを落とすべく、腰の動きを速めた。

ドスン！ ドスン！ ドスン！

四つん這いのカーラを背後から、破城槌でも打ち込むように、最深部まで叩き込む。「ひい、ひい、だ、ダメ、わたし、これやられると、ひいひいひい」

どうやら、以前、ロクトとやった時、えいえいと終わりなく子宮口を打ち抜かれ、何度も失禁を繰り返しながら、屈辱の連続絶頂させられた体験を思い出したようだ。

カーラの目からは涙が溢れ、だらしなく開いた口元からは涎が溢れる。

そんなたちまち追い詰められたカーラに、エリザベートが声をかける。

「いかがかしら？ わたくしの旦那様のおちんぼ」

「で、でかい。あたし、デカチンに興味はないんだけど……やっぱり、この充実感は凄い。オマ○コが広がっちゃう♪」

カーラの感想を、エリザベートは満足げに頷く。

「わたくしの旦那様のお大事は、世界一ですわ」

「世界一は、美少年の童貞チンポよ。こんな棍棒みたいにつかなくて汚いチンポ、邪道よ！ ああ、邪道だけど、苦しいけど……気持ちいい」

好みと対極にある逸物に追い詰められていくカーラの姿に、エリザベートは嫣然と笑う。「うふふ、いい年していまだに結婚もできない女は、おちんちんに飢えていますのね。ほんと浅ましいですわ。特別の好意でわたくしの旦那様の特上おちんぼを味わわせてあげているんですからね」

「らめ、らめ、らめ、いく、いく、いく、またいく」

いかに小馬鹿にされようと、いまのカーラには反論することはできない。

完全にちんぼの奴隷状態だ。ザラザラの贅肉にギューギュー締められたロクトは、雄叫

びを上げた。

「そろそろ、いくぞおおお!!!」

「ひい、ひいひい」

ドクンッ！ ドクンッ！ ドクンッ！

膣内射精される女の歓びに、気高き女將軍は悶絶する。

しかも、ロクトは射精しながらも、腰を動かし続けた。そうして、動いているうちに一度は力を失った逸物が再び復活する。

大きくなつたところで、カーラの膣穴から引き抜いた。

「あ、ああ……」

精根尽きたといった様子でシートに顔を埋めたカーラの高く掲げられた尻からは、ドブドブと白濁液が逆流した。

「さて、次は」

残りの三人に目をやると、レイニーは首を横に振るつた。

「わ、わたしは別に……他の方を優先してください」

どこまでも奥ゆかしい女である。

「こういう祭りの時に変な遠慮は無用なんだがなあ……」

「それでは、次はヴェルでよろしいですわ」

エリザベートの提案に、ヴェルは驚く。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!